

演題番号：4

演題名：管内と畜場に搬入されたイノブタにおけるE型肝炎ウイルスの保有状況調査

発表者：○今井隆之、工藤奈々、三輪英一

発表者所属：北部食肉衛生検査所

1. はじめに

E型肝炎は、E型肝炎ウイルス（以下、HEVとする。）によって引き起こされる急性肝炎であり、感染症法で4類感染症に分類されている。HEVはブタ、イノシシなどの動物にも感染する人獣共通感染症であり、糞便や汚染水を介して経口感染する。ヒトでは感染動物の食肉等を喫食することで感染することもある。

これまで、豚、イノシシのHEV保有状況に関する報告はあるが、イノブタについてはない。そこで、今回、管内と畜場に搬入されたイノブタについて調査を実施し若干の知見を得たので報告する。

2. 材料および方法

平成28年7月から12月までに管内と畜場に搬入されたイノブタの廃棄処分となった大腸98体から内容物を採材した。

材料については、それぞれ、約10%乳剤になるよう調整後、遠心分離し、その上清を収集した。次に、この上清からウイルスRNAを抽出し、DNase処理およびcDNA作成後、nested PCRによりカプシド遺伝子検出を実施し、HEVの有無を判定した。

3. 結果

採取した98検体について2検体（2.0%）からHEV遺伝子を検出した。2検体は同ロット（同一農場）であり、うち1検体については肝臓病変として肝包膜炎を認めたが、他の検体については、肉眼的所見は認められなかった。

4. 考察

今回の調査結果からイノブタが人へのHEV感染源となりうる可能性が示唆された。

また、肝炎を主徴とする疾病であるにも関わらず、肝臓に肉眼的病変は認められない検体があったことから、と畜検査で排除することが困難であることが分かった。

一般的に肥育豚は移行免疫が失効する二か月齢前後に感染し、出荷時にHEVはほぼ消失すると報告されている（2003年 高橋ら）。一方、野生イノシシ成獣で0～10%の割合でウイルスを保有しているという報告もある（2005年 熊本県、2008年 福岡県等）。

今回、イノブタからHEVが検出された1つの要因として、飼養環境や飼養方法の違い等から、ウイルスに暴露されるタイミングが肥育後期にずれ込んだことが推察される。今後、得られた調査結果について、関係機関と情報を共有していきたい。